

## ドイツ留学について

総合科学部 小島 基

### 概略)

我々日本人にとって公的なドイツ留学の機会が多いといえない。広島大学はチュービンゲン大学と提携していて、文部省留学生として毎年1~2名の学生が広島大学から1年間の予定で彼の地へ派遣されている。しかし、実際ドイツの大学にはおびただしい数の日本人及び外国人留学生がいる。日本人の場合、そのほとんどが私費の留学生か、日本の会社から派遣された自然系の社会人である。他方、ドイツ側から DAAD とかフンボルト奨学金があるが、これらは日本の学部大学生には手が届かないだろう。だが夏休みを利用して2~3か月間ドイツの大学に語学研修することは、費用の都合さえつければ容易である。ドイツ(オーストリアも)の各大学が夏期講座を催しているのだから、どこの大学を選ぶかはこちらの自由である。まったくの初級クラスから同時通訳や文学、哲学の講義まで受講でき、経費は格安である。出席すると一応、ドイツの大学の雰囲気は味わえる。毎年たくさんの日本人が参加している。これらに関するインフォメーションは総合科学部ドイツ語連絡室で尋ねればよい。

10月に東西ドイツが統一されるので、今後ドイツの大学がどう進展するのか、まだはっきりしていないようだ。いずれ東ドイツにある大学にも容易に行ける時が来ると思われるが、目下、不確定要素が多すぎるので、当分まだ東の大学にはでかけない方がよいのではないか。また昨年から東西統一に合わせ、多くの人たちが西ドイツに入ってきて、学生数も飛躍的に増大したらしい。そこで住居不足が特に大都市ではひどく、下宿はほとんどみ

つけられないという。学生寮も例外でないかもしれない。出発前には宿の確保はきちんとしておく必要がある。ドイツの大学は、ただ学ぶためだけ(!)に存在している。入学式も卒業式もない。クラブ活動も大学対抗もない。したがって大学は就職斡旋業務もしていない。しかしドイツの大学及び大学生は大変恵まれている。60前後ある大学はすべて国立大学で、入学金や学費など一切不必要。学生扶助会経費(年10~15マルク)と医療保険料(強制)——半年350マルク——があるくらいのものである。日本人私費留学生の数が多い理由はこのへんにあるのかもしれない。ドイツではアビトゥアールと呼ばれる高校卒業国家試験を合格すると、原則としてどこの大学でも、何学部でも学べる。大学に自ら出向いて学籍登録(Imatrikulation)をすれば、受講講義を記入するノートがもらえる。これはどこの大学にも共通している。ただし、学生が多く来過ぎる学部は調整される。

私費留学をめざす者は手続きなどを在日ドイツ公館にまず問い合わせるべきである。日本の大学卒業者は自動的にドイツの大学に入学を許可される。ただし各大学が行なうドイツ語の試験(文法、読む、書く、聴く、話す)に合格しなければならない。試験の程度は州(Land)により違いがあるらしい。出発が決定したら、学生寮を確保する必要がある。彼の地に到着したら、大学の Studentenwerk(学生相互扶助会)に行き、必要な便宜をはかってもらう。そして Rathaus(市役所)に

出向き、滞在許可をもらう。ドイツ語が駄目なら、英語でも可。大学によって多少のずれはあるが、入学は4月と10月である。その直前あたりにドイツ語の試験が行なわれる。最初失敗した場合、大学の聴講生になってビザ（最初たぶん3か月間のビザしかでない）を更新し、大学のドイツ語コースか町のゲテ・インスティテュートの語学教室に通い、半年後に再び挑戦する。それでも落ちてしまったら、帰国の方がよろしい。日本の大学を中途退学してドイツに行く場合、Studienkollegに通うのもよいだろう。これは高校程度の教科をドイツ語で授業してくれる。言葉の不安な外国人ばかりが来るところで、ドイツ語の勉強にはなる。そこで1~2年学び、大学へ入るのは学問的な言葉の熟達の上で意味があると思われる。ともかくドイツ語ができなくては何も始まらない。

学生寮は完備しているし、大学のメンザ（食堂）で毎回食べれば、だいたい月に1,000マルクで学生生活は可能であろう。留学生ビザの場合、お金を稼ぐためドイツで就労するのは原則として禁止されているので注意。アルバイト程度のことは休暇中ならできる。また学生同士の交流も盛んでいろいろと面倒を見てもらえる。学生寮にはドイツ人のチューターがいて、寮祭やクリスマス、近くの町へバス旅行など、勉強以外にも楽しいことがある。各国の料理を順番に作って試食するのも楽しい。友情を結んだ外国人学生の故郷を安く訪問できることもある。コンサートや観劇には学割が利くので、大いにでかけてみるべきだ。ともかく勉強においてはもちろんのこと、生活をエンジョイする点でも、本人の積極性が第一である。この点はいくら強調してもし過ぎることはない。消極的にしていけないことは、おそらく何一つない。日本人の神秘性など、もうまったく通用しない。病気が馬鹿かと思われるのが関の山である。どんどん内容あることをしゃべって、ぐんぐん動き回ることである。黙っていたらおいていかれるばかりで、誰も救ってくれない。日本の大

学でドイツ語を受講していれば、半年から1年でドイツ語に慣れ、日常生活は不自由しなくなる。大学の講義が分かるかどうかは、内容の問題なので何とも言えないが、2年ぐらいを覚悟しなければならない。日本できちんと文法を仕上げ、正しく読めるようになっていかなければならない。講義を聞くためには、正しいドイツ語をきちんと知らなくてはならない。これには訓練がいる。なにしろ講義の最初に教師が学生の読むべき資料を紹介し、それを完璧にこなすのは外国人留学生に容易なことでないのだから。おそらく自然系の学生にとっても同様であろう。日常生活のドイツ語などすぐに慣れる。これができるドイツ語ができるようになったと勘違いする人が多いが、困ったものだ。また、たくさん日本人がいるので、その中に浸り切ってしまうのは問題である。丸山真男の「タコ壺式」文化交流にならないよう注意すべきである。日本人はむしろ避けるように努めるのが良いかもしれない。その方が逆にノイローゼに陥らなくてすむように思う。自分が変だなと自覚したり、ドイツ全般に対して不満を言い始めるようになったら、ただちに帰国した方がいい。

次に目的を定めて留学する学生のため試験について書いておく。ドイツの大学は資格を得るためにある。大学には大学院がない。また一般教養なる奇妙な期間もない。初修語学なるものもない。それらはすでに終了しているものとみなす。したがって特殊なもの（例えば日本語、中国語など）を除いて、必要なら高等学校（ギムナジウム）へ行って単位を取ってこなければならぬ。その際、大学が高校との連絡をとってくれるから、安心していい。ただしラテン語とギリシャ古典語に関しては外国人のため大学が語学講座を設けている。試験は大ざっぱに言って、Magister試験、国家試験、Doktor試験の3種類ある。この他、特に自然系の学生にはDiplomの試験がある。これらの試験はいずれも、論文、筆記、口頭試験に分かれる。Magisterは人文

系と社会系の学生に課せられる。主専攻科目の他に2つの副専攻科目を受けなければならない。ドイツ人で4年間ぐらいかかるようである。国家試験は国家公務員になる学生に課す試験である。薬剤師、医者、教員、法律家など。外国人でも、制限はあるが、受験できる。Doktor 試験は専門によってそれぞれ異なるようである。まず Diplom, Magister, 国家試験合格の資格を持っている必要がある。学生はまず学位論文を審査してくれる学位授与資格教授（教授が全員持っているとは限らない）を探さなければならない。ドイツでは Doktor 試験準備は、例えば英語圏の大学とは大きく違う。要するにそれを終了すれば、Doktor の学位が授与されるという規定されたプログラムとか、特別課程といったものは

一切ない。Doktor は研究者となるための最初の資格である。日本の「博士号」のように学問を完成した学者に送られるものとは資格を異にしている。しかし、論文の視点はそれまでにないまったく新しいものでなければならぬ受理されない。これらのことは、ドイツに行って大学の助手に詳しく聞くと良い。あるいはドイツの大学から必要な冊子を取り寄せ、よく調べるのも一つの方法だろう。また、Vorlesungsverzeichnis（授業内容要覧）が毎学期出版されているので、これでどこでどの先生がどんな講義をしているかすぐ分かる。

留学をめざす学生は大阪、神戸のドイツ総領事館と連絡を取り、十分なインフォメーションを得ることから始めよう。窓を開いて、外へ飛び出そう！

## 各国大学事情と日本人留學生の現状

### ソ連へ留学するには

総合科学部 米重文樹

10月の終わりと言えばモスクワでは初雪の季節、ちょうどその1か月前に日ソ政府交換留学生としてモスクワに出発したN君から無事モスクワ大学の寮に落ち着いたとの便りを受け取った。この日ソ政府交換留学制度というのが何と驚くなかれ、昨年度が第1回の派遣で、総勢20名近くがソ連に出発したのが昨年の9月である。したがって今年が2回目ということになる。これは交換留学であるからソ連側からもこの制度で日本の大学に留学できるわけで、広島大学にも昨年度1名、今年度2名がそれぞれ1年の期間で来ている。（いずれも教育学部日本語学科）。この制度は、政府レベルの協定に基づくもので、日本の大学生、大学院生および若手の研究者（35才以下）であれば誰でも応募することができる。

（募集要項は毎年10月～11月にかけて全国の大学を通じて配布・掲示される）。あたりまえと言えはあたりまえの話であるが、一般の大学生をも対象としたこういった形での正規のルートが今までなかったということ自体が、政府レベルでの日ソ間の文化交流がいかに立ち遅れていたかを物語っている（国立大学の研究者を対象としたものは文部省および日本学術振興会の在外研究員制度がすでにあるが、ここでは広大学生を含めた一般大学生の留学という観点から話をしているので除外することにする）。

ところで、ソ連の大学および大学院で学生として学ぶというルートがこれまでまったくなかったわけではない。ひとつは、日ソの大学同士が独自の交換協定を結んでいるような